

名人伝

中島敦

青空文庫

趙ちようの邯鄲かんたんの都に住む紀きし昌しようという男が、天下第一の弓の名人ちようになるうと志を立てた。己おのれの師たのと頼たのむべき人物を物色するに、当今弓矢をとつては、名手・飛衛ひえいに及ぶ者があるうとは思われぬ。百歩を隔へだてて柳りゆう葉ようを射るに百發百中するという達人だそうである。紀昌は遥々はるばる飛衛をたずねてその門に入った。

飛衛は新入の門人に、まず瞬またたきせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織はたおり台の下に潜もぐり込んで、そこに仰あおむ向けにひっくり返った。眼めとすれすれに機躡まねきが忙しく上下往来するのをじつと瞬かずに見詰みめていようという工夫くふうである。理由を知らない妻は大いに驚おどろいた。第一み、妙な姿勢みようを妙な角度から良人おととに覗のぞか

れては困るといふ。厭いやがる妻を紀昌は叱しかりつけて、無理に機を織り続けさせた。来る日も来る日も彼はかれこの可笑おかしな恰かつこう好こうで、瞬まねききせざる修練を重ねる。二年の後のちには、遽あわただしく往返する牽挺まねきが睫毛まつげを掠かすめても、絶えて瞬まげくことがなくなつた。彼はようやく機はいだの下から匍はいだ出す。もはや、鋭利えいりな錐きりの先をもつて瞼まぶたを突かれても、まばたきをせぬまになつていた。不意ひに火ひの粉こが目こに飛入ろうとも、目の前に突とつぜん然はいかぐら灰神樂が立とうとも、彼は決して目をパチつかせない。彼の瞼まぶたはもはやそれを閉じるべき筋肉の使用法を忘れ果て、夜、熟じゆくすい睡すいしている時でも、紀昌の目はカツと大きく見開かれたままである。ついに、彼の目の睫毛まつげと睫毛まつげとの間に小さな一匹ひきの蜘蛛くもが巣すをかけるに及んで、彼はようやく自信を得

て、師の飛衛にこれを告げた。

それを聞いて飛衛がいう。瞬かざるのみではまだ射しやを授けるに足りぬ。次には、視みることを学べ。視ることに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微びを見ること著ちよのごとくなつたならば、来きたつて我に告げるがよいと。

紀昌は再び家に戻もどり、肌着はだぎの縫目ぬいめから虱しらみを一匹探し出して、これを己おのが髪かみの毛をもつて繫つないだ。そうして、それを南向きの窓に懸かけ、終日にら睨くみ暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下つた虱を見詰める。初め、もちろんそれは一匹の虱に過ぎない。二三日たつても、依然いぜんとして虱である。ところが、十日余り過ぎると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えて来た

ように思われる。三月目の終りには、明らかに蚕ほどの大きさに
見えて来た。虱を吊るした窓の外の風物は、次第に移り変る。熙
々として照つていた春の陽はいつか烈しい夏の光に変わり、澄んだ
秋空を高く雁が渡つて行つたかと思うと、はや、寒々とした灰色
の空から霏が落ちかかる。紀昌は根気よく、毛髪の先にぶら下
つた有吻類・催痒性の小節足動物を見続けた。その虱も何十
匹となく取換えられて行く中に、早くも三年の月日が流れた。あ
る日ふと気が付くと、窓の虱が馬のような大きさに見えていた。
占めたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。彼は我が目を疑つた。人
は高塔であつた。馬は山であつた。豚は丘のごとく、雞は城
楼と見える。雀躍して家にとつて返した紀昌は、再び窓際

の虱に立向い、燕角えんかくの弧ゆみに朔蓬さくほうのやがらをつがえてこれを射れば、

矢は見事に虱の心の臓つらぬを貫いて、しかも虱を繋いだ毛さえ断きれぬ。

紀昌は早速さつそく師もとの許おもむに赴いてこれを報ずる。飛衛は高踏こうとうして

胸を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒ほめた。そうして、直ちに射

術おうぎひでんの奥儀秘伝あまを刺すところなく紀昌に授け始めた。

目の基礎訓練に五年もかけた甲斐かいがあつて紀昌の腕前うでまえの上達

は、驚くほど速い。

奥儀伝授が始まつてから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔てて

柳葉すてを射るに、既に百発百中である。二十日の後、いっぱいに水

を湛たたえた盃さかずきを右肱ひじの上に載のせて剛弓ごうきゆうを引くに、狙ねらいに狂くるいの

無いのはもとより、杯中の水も微動だにしない。一ひとつき月の後、百

本の矢をもつて速射を試みたところ、第一矢が^{まと}的^{あた}に中れば、続いて飛来つた第二矢は誤たず第一矢の括^{やはす}に中つて突き刺^ささり、更に間髪を入れず第三矢の鏃^{やじり}が第二矢の括にガツシと喰^くい込む。矢^し矢^し相属し、発^{はつ}発^{はつ}相及んで、後矢の鏃は必ず前矢の括に喰入るが故に、絶えて地に墜^おちることがない。瞬く中に、百本の矢は一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いたその最後の括はなお弦^{げん}を衝^{ふく}むがごとくに見える。傍で見えていた師の飛衛も思わず「善し！」と言つた。

^{ふたつき}二月の後、たまたま家に帰つて妻といさかいをした紀昌がこれを威^{おど}そうとて烏号^{うごう}の弓に※と引絞^{ひきしぼ}つて妻の目を射た。矢は妻の睫毛三本を射切つてかなたへ飛び去つたが、射られた本人は一

向に気づかず、まばたきもしないで亭主ていしゅを罵り続けた。けだし、彼の至芸による矢の速度と狙いの精妙さとは、実にこの域にまで達していたのである。

もはや師から学び取るべき何もなくなつた紀昌は、ある日、ふと良からぬ考えを起した。

彼がその時独りつくづくと考えるには、今や弓をもつて己に敵すべき者は、師の飛衛をおいて外ほかに無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かねばならぬと。秘ひそかにその機会うかがを窺うかがっている中に、一日たまたま郊野こうやにおいて、向うからただ一人歩み来る飛衛に出遇であつた。とつさに意を決した紀昌が矢を取

つて狙いをつけられれば、その氣配を察して飛衛もまた弓を執つて相
応ずる。二人互いに射れば、矢はその度に中道にして相当り、共
に地に墜ちた。地に落ちた矢が輕塵をも揚げなかつたのは、両
人の技がいずれも神に入っていたからであらう。さて、飛衛の矢
が尽きた時、紀昌の方はなお一矢を余していた。得たりと勢込ん
で紀昌がその矢を放てば、飛衛はとつさに、傍なる野茨の枝を
折り取り、その棘の先端をもってハツシと鏃を叩き落した。つ
いに非望の遂げられないことを悟つた紀昌の心に、成功したなら
ば決して生じなかつたに違いない道義的慚愧の念が、この時忽
焉として湧起つた。飛衛の方では、また、危機を脱し得た安
堵と己が伎倆についての満足とが、敵に対する憎しみをすつか

り忘れさせた。二人は互いに駈寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた。(こうした事を今日の道義観をもつて見るのは当らない。美食家の斉の桓公が己のいまだ味わつたことのない珍味を求めた時、厨宰の易牙は己が息子を蒸焼にしてこれをすすめた。十六歳の少年、秦の始皇帝は父が死んだその晩に、父の愛妾を三度襲うた。すべてそのような時代の話である。)

涙にくれて相擁しながらも、再び弟子がかかる企みを抱くよ
うなことがあつては甚だ危いと思つた飛衛は、紀昌に新たな目標
を与えてその気を転ずるにしくはないと考えた。彼はこの危険な
弟子に向つて言った。もはや、伝うべきほどのことはことごとく

伝えた。爾なんじがもしこれ以上この道の蘊うん奥のうを極めたいと望むならば、ゆいて西の方かたたいこう大行けんの嶮けんに攀よじ、霍かく山ざんの頂を極めよ。そこには甘蠅かんよう老師とて古今ここんを曠むなしゆうする斯道しどうの大家がおられるはず。老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど兎戯じぎに類する。爾の師と頼むべきは、今は甘蠅師の外にあるまいと。

紀昌はすぐに西に向つて旅立つ。その人の前に出ては我々の技のごとき兎戯にひとしいと言つた師の言葉が、彼の自尊心にこたえた。もしそれが本当だとすれば、天下第一を目指す彼の望も、まだまだ前途程ぜんとほどとお遠い訳である。己が業わざが兎戯に類するかどうか、とにもかくにも早くその人に会つて腕を比べたいとあせりつつ、

彼はひたすらに道を急ぐ。足裏を破り脛すねを傷つけ、危巖きがんを攀さじ棧さ道んどうを渡つて、一月の後に彼はようやく目指す山顛さんてんに辿たどりつく。氣負むかい立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔にゆうわ和な目をした、しかし酷ひどくよぼよぼの爺じいさんである。年齢は百歳をも超こえていよう。腰こしの曲まっているせいもあつて、白髯はくぜんは歩く時も地ひに曳ひきずつている。

相手が聾ろうかも知れぬと、大声に遽とだしく紀昌は来意を告げる。己が技の程を見てもらいたいむねを述べると、あせり立った彼は相手の返辞をも待たず、いきなり背に負うた楊幹ようかん麻筋まきんの弓を外して手に執とつた。そうして、石碣せきけつの矢をつがえると、折から空の高くを飛び過ぎて行く渡り鳥の群に向つて狙あいを定める。弦に

応じて、一いっせん箭せんたちまち五羽わの大鳥おおとりが鮮あざやかに碧空へきくうを切つて落ちて来た。

一通り出来るようじやな、と老人おぢやが穏おだかな微笑えいごを含ふくんで言う。だが、それは所詮しよせん射しや之射のしやというもの、好漢こうかんいまだ不射ふしや之射のしやを知らぬと見える。

ムツとした紀昌きぢやうを導ろういて、老隱ろういん者しやは、そこから二百歩にひゃくふばかり離れた絶壁ぜつぺきの上まで連れて来る。脚きゃ下つは文字通りびようぶの屏風びやうぶのごとき壁へき立りつ千仞せんじん、遥はるかか真下まに糸いとのような細こさに見えるけいりゆ 溪けい流りゆうをちよつと覗のぞいただけでたちまち眩暈めまいを感じるほどの高さである。その断崖だんがから半なかば宙ちゆうに乗出した危石あやしいの上につかつかと老人らうじんは駈かり上あり、振返ふりかえつて紀昌きぢやうに言う。どうじや。この石の上で先

刻の業を今一度見せてくれぬか。今更引込ひっこみもならぬ。老人と入代りに紀昌がその石を履ふんだ時、石は微かすかにグラリと揺ゆらいた。強しいて氣を励はげまして矢をつがえようとすると、ちようど崖がけの端はしから小石が一つ転がり落ちた。その行方ゆくえを目で追うた時、覚えぬ紀昌は石上に伏ふした。脚あしはワナワナと顫ふるえ、汗あせは流れて踵かかとにまで至った。老人が笑いながら手を差し伸のべて彼を石から下し、自ら代つてこれに乗ると、では射というものをお目にかけてようかな、と言った。まだ動悸どうきがおさまらず蒼あおざめた顔をしてはいたが、紀昌はすぐに氣が付いて言った。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？ 老人は素手すてだったのである。弓？ と老人は笑う。弓矢の要いる中はまだ射之射じや。不射之射には、烏漆うしつの弓も肅しゆくしん慎しんの矢も

いらぬ。

ちようど彼等の真上、空の極めて高い所を一羽の鳶とびが悠々ゆうゆうと輪えがを画えがいていた。その胡麻粒ごまつぶほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅あまごが、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引絞つてひようと放てば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちて来るではないか。

紀昌は慄然りっぜんとした。今にして始めて芸道の深淵しんえんを覗き得た心地であつた。

九年の間、紀昌はこの老名人の許とどに留とどまつた。その間いかなる修業を積んだものやらそれは誰だれにも判わからぬ。

九年たつて山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の変つたのに

驚いた。以前の負けず嫌いな精悍な面魂はどこかに影をひそめ、なんの表情も無い、木偶のごとく愚者のごとき容貌に変わっている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの顔付を一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕のごとき、足下にも及ぶものでないと。

邯鄲の都は、天下一の名人となつて戻つて来た紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返つた。

ところが紀昌は一向にその要望に応えようとしなない。いや、弓さえ絶えて手を取ろうとしない。山に入る時に携えて行つた楊幹麻筋の弓もどこかへ棄てて来た様子である。そのわけを訊ねた一人に答えて、紀昌は懶げに言つた。至為は為す無く、至言は言を

去り、至射は射ることなしと。なるほどと、至極物分りのいい邯鄲の都人士はすぐに合点した。弓を執らざる弓の名人は彼等の誇りとなつた。紀昌が弓に触れなければ触れないほど、彼の無敵の評判はいよいよ喧伝された。

様々な噂が人々の口から口へと伝わる。毎夜三更を過ぎる頃、

紀昌の家の屋上で何者の立てるとも知れぬ弓弦の音がする。

名人の内に宿る射道の神が主人公の睡っている間に体内を脱け出し、妖魔を払うべく徹宵守護に当っているのだという。彼の

家の近くに住む一商人はある夜紀昌の家の上空で、雲に乗った紀昌が珍しくも弓を手にして、古の名人・羿と養由基の二人を相手に腕比べをしているのを確かに見たと言ひ出した。その時三名人

の放った矢はそれぞれ夜空に青白い光芒を曳きつつ参宿と天狼星との間に消去つた。紀昌の家に忍び入ろうとしたところ、堀に足を掛けた途端に一道の殺気が森閑とした家の中から奔り出てまともに額を打つたので、覚えず外に顛落したと白状した盗賊もある。爾来、邪心を抱く者共は彼の住居の十町四方は避けて廻り道をし、賢い渡り鳥共は彼の家の上空を通らなくなつた。

雲と立罩める名声のただ中に、名人紀昌は次第に老いて行く。既に早く射を離れた彼の心は、ますます枯淡虚静の域にはいつて行つたようである。木偶のごとき顔は更に表情を失い、語ることも稀となり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至つた。「既

に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳のごとく、耳は鼻のごとく、鼻は口のごとく思われる。」というのが、老名人晩年の述懐じゅつかいである。

甘蠅師の許を辞してから四十年の後、紀昌は静かに、誠に煙けむりのごとく静かに世を去った。その四十年の間、彼は絶えて射を口にする事が無かった。口にさえしなかつた位だから、弓矢を執つての活動などあろうはずが無い。もちろん、寓話ぐうわ作者としてはここで老名人に掉尾ちようびの大活躍だいかつやくをさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼についてはただ無為にして化したとばかりで、次のような妙な話の外

には何一つ伝わっていないのだから。

その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行ったところ、その家で一つの器具を見た。確かに見憶えのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途も思い当らない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が冗談を言っているとのみ思つて、ニヤリととぼけた笑い方をした。老紀昌は真剣になつて再び尋ねる。それでも相手は曖昧な笑を浮べて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌が真面目な顔をして同じ問を繰返した時、始めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の眼を凝乎と見詰める。相手が冗

談を言っているのでもなく、気が狂っているのでもなく、また自分が聞き違えをしているのでもないことを確かめると、彼はほとんど恐怖きょうふに近い狼狽ろうばいを示して、吃りながら叫んだ。

「ああ、夫子ふうしが、——古今無双ここんむそうの射の名人たる夫子が、弓を忘れてられたとや？ ああ、弓という名も、その使い途みちも！」

その後当分の間、邯鄲の都では、画家は絵筆を隠かくし、楽人は瑟しつの絃げんを断ち、工匠こうしようは規矩きくを手にするのを恥はじたということである。

(昭和十七年十二月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 中島敦」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「中島敦全集 第一巻」筑摩書房

1987（昭和62）年9月

初出：「文庫」

1942（昭和17）年12月号

入力：大内章

校正：j.utiya

1998年10月26日公開

2004年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

名人伝

中島敦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>